

## 四月作品

### その一集



風間 博夫選

若者の声 福島 明美 北海道

人の世にすこし外れて暮らしてゐる山麓のホーム雪に埋もれてカーテンを全開にして明り消し窓に見てゐる真夜の半月  
迂闊にも出たる電話に威される「あなたの情報漏れていますよ」このわれが御尋ね者になつてゐる行つたことない新潟県でああこれはどこかで聞いた話だぞ喋りつづける若者の声  
冷静になりゆくわれの悲しみは男孫に似たる若者の声

ストロー用ふ 村 沢 寿美子 北海道

舗装路の薄ら氷踏めばボキバキと登校の朝よみがへり来る

修業僧の如き絶食五日間のベッドのくらし南無阿弥陀仏  
検査入院いかなる結果に及ぶのか卒寿一歳かくごをきめる  
病院は閑かにあらず看護師の諭せる声にさからふ患者  
絶食の後の栄養ドリンクはむせないやうにストロー用ふ  
北狐いつ通りしか雪深き庭に足跡くぼみて残る

二択に悩む 清水 恭子\*岩手

長身の孫等の間に挟まれて我はV字の谷間となりぬ  
震災後初に神社を詣でたる令和八年二拍手の音  
其々がそれぞれの場に帰り行き一人静かな日常戻る  
孫二十歳津波背にして手を引かれ逃げたる記憶薄いと語る  
礼服のサイズアップの購入か瘦せるべきかの二択に悩む  
小正月の悪魔払いの虎舞いは六年振りに各戸を廻る

震度4来る 奥山 勝子 宮城

四半世紀たてば賀状は半減すあの人あの友如何に在さむ  
元旦を過ぎて数日二、三枚賀状届くは御負にも似て  
「お歳よりお元氣よね」と友ら言ふ降誕祭の夜の贈り物

師走半ばやるべき十余り書き出して終りたるとき除夜の鐘なる折々に危惧してたこと起りたり湯浴みの最中震度4来る  
「楽しかったわ」二通のメール 新年会の幹事のつかれふうわり飛んだ

ハンマープライス 京 表 楳 茨 城

絵が好きなこともでありし小六われ小づかひでひとり雪舟を観るあのころは百科全書が家にありグラビアばかり飛ばし見てゐた新しい未来の国宝みつけたし願へど苦手な現代アートかくもケバいいアクリル絵の具を塗りたくる現代アートは生き残るのか一度くらのオークションにて聞いてみたい好きな絵落としハンマープライス  
パワード生年月日は却下され思ひ出さねばまた最初から

原賀 櫻子選

跨 線 橋 高 橋 美羽子 神奈川

小菊咲く叢菊の咲く庭今は、珍しくなりて古家懐かし  
明日探しに行かう失くしたブローチを記憶をたどり時遡り  
弁当とランチ売切れカレーにす再び来ぬかもしれぬ食堂  
観音と富士山見える跨線橋高層ビルなきこの街好む



夕日さすバスターミナルに降り立ちて師走の駅の一人となりぬ  
さつきまでペラッ空にありし月今かうかうと発光しをり

窓 一 枚 福 島 健太郎 神奈川

一月に数輪咲けるサクラゆゑ裸木なれどしばし見入りぬ  
秦野へとトンネルを抜け眼前に富士の迫れる冬の彫琢  
情愛をはぐくみ生きるも才にしてわづか揺れをり朝のカーテン  
一匙の狂気さへなく歳かさね珈琲に落ちるミルク一滴  
愛といふコトバの消えてそれからの散文的な人生(ひとよ)であつた  
晩年はほぼ手遅れの時なれど窓一枚を開く日のある

知つてたよ 松 本 節 子 神奈川

雨降りのクリスマスイブあなたから手紙をもらふ結婚記念日  
ぎんいろのシンクへ降りておかめいんこ黄ばねはばたき聖夜の水洗び  
知つてたよ知らぬふりしてゐてただ己が短所で手いっぱいだし  
要するにわたしの敵はわたしです二十四年の介護の事実  
星照らす道歩けねどたらちねはからだにひとついのちを灯す  
夫とゆくみゆき通りは舅姑(きょうこ)のまた父母の逢瀬の通り

ギリシヤ語 奥 浩 昭 東京

からころとからからころとわが耳朶(みみ)のこりてやがて地に着く枯葉  
息子より贈られし酒麴(だうまい)祭を飲む元日の朝、昼、夜に  
「コスモス」の一月号を読みおもふ「コスモス」にもうめないだれかれ  
買ひ物で浮き立つ午後立川の街に五名のシュプレヒコール



スマホ用マクロレンズで観る金蘭、絶滅危惧の儂さに咲く

たらちねの褒美

坪井真里 東京

正月の買ひ出しさなかに電話あり母の緊急入院知らせて  
病院のベッドの上に白紙しろがみのやうに平たき母の顔あり

少しづつ母に血の気が戻りきてなぜ病室にゐるのかと聞く  
年の瀬のひとりぼつちのさみしさに発熱したる母かと思ふ  
たらちねの褒美にあらん鶴岡は雪のおほつごもりを迎へぬ  
ふるさとを包む新雪踏みしめぬキクキク鳴れば足裏たのしく

まつさら

中道 操 東京

クサイチゴの花は気まぐれ花びらが五枚だつたり六枚だつたり  
杖置きて道ばたの石に掛けをれば大丈夫かと犬連れたひと  
屋上に屋を架すごと飲むくすり奇つ怪なわれを内にはぐくむ  
昨日より今日が元氣と思へたらもうそれだけで生きてゐられる  
医者通ひするとき元氣そのほかに行くべきところ今はあらずて  
白梅のちらりほらりとひらきそめ朝の日ざしにまつさらに照る

赤き顔

一ノ瀬 清子 新潟

河原の空の群青、昼星の如くかがやく冬鷺一羽  
注射二本打ちて下がりし風邪熱のけだるさ残る雪の朝を  
床の間のうすくらがりうすくらがりに浮き出でて円く息づく餅の青黴  
地震にて鱗割れ傾ぐ石灯籠庭木に馴寄り緑き苔吹く  
ずんもりと炬燵にもぐる女男の孫ごはんですよに赤き顔出す

一日かけ不要の本を選び終へし身に冬の陽はうすく射し来る  
プラトンもプラントクンもギリシャ語と知つてうれしい花いちもんめ

眠りの出口

関 裕子\* 東京

新年の歳神様に箱根路を走る韋駄天たちが加わる

国じゅうの注目あつめ駅伝を時計つげずに走るエースよ  
限界を自分の体にききながらアンカー登り登りてゴール  
凍てついた今朝の眠りの出口にて見えた気がした降り積む雪が  
薄明に出勤する子が朝食のパンそしやくする音のひそけき  
早朝の床で聞きおり出勤の子がカギを開け門扉を閉める

大野 英子選

絶滅危惧の儂さ

田村悦子 東京

熱爛と蕎麦掻き頼み通気取る夫は小鉤こかぎの食ひこみ氣にす  
持ち前の美貌を更に改造す女優九十、法令線なし  
オレゴン産松茸用る加州米炊く晚餐にトランプ呼ばむ  
成城のブティック並ぶその先に買取店がまたオープンす  
眩暈するほどに新聞埋め尽くす入試問題、回答一文字

餅二つ雑煮とあんころ正月は胃の腑を満たすひとりぐらしは

黒豆 つまむ 服部 泰\*新潟

子や孫にバイバイ手を振り見送つて残るおせちの黒豆つまむ  
ゲーム機をもらった日から部屋ごもる子に変わったとサントに苦情  
にいちやんにいじめられたと泣く様子演技じみきて明日は三歳  
〈終活〉というも楽しき仕事かなゆつくり反芻し捨てるを選ぶ  
世の中が大きく右へうねる今〈中道〉の旗を立てるのも良し  
くるくると電波時計の針まわる午前三時の凍てつく窓辺

鈴木 竹志選

わが玉の緒 西村 好美 富山

入念に準備運動したる夫雪搔きせむと飛び出してゆく  
降りむとし見慣れぬ駅に戸惑へりおしやべりが過ぎ乗り越したるとは  
年賀状じまひ伝ふる年賀状わけても寂し九十五の師の  
唐突にティッシュの箱が空からになるわが玉の緒もかういふことね  
「まぶしい」を「かがつばしい」と方言で言へば黒部の子どもに戻る  
見るたびに父への言葉は異なれり五十で逝きし遺影が見つむ



LINEさまさま 中田 雅子 長野

昭和の世百一年目に突入すその九十三年吾は生き継ぐ  
亡き夫の知らざる曾孫ら仏前におのおの小さき手合はせてゐたり  
仰ぎたる視野一面の冬晴れのかなたに雪の連山さやか  
新しき年のひかりは雪かづく北アルプスを茜に染める  
世にうとき独り居われの日々思ひ赤きスマホを持たされ五年  
朝一にその日の予定・体温を娘におくるLINEさまさま

鹿 よ け 野村 房子\*長野

バリカンで刈り取られしごと冬菜消ゆこの食べ方はきつと鹿なり  
「まるで鹿を飼っているようだ」と夫は言う冬菜・長ネギみな食べられて  
鹿よけに効果あるらしローズマリーを波稜草の上に置いてみる  
宰相は「笑顔」の仮面貼りつけてドラマたたいて友好演ず  
若者もすなる「タイパ」をわれもする韓ドラ録画しCM飛ばす  
アルバムを整理しおればわが写真半分近く教師の顔なり

楽観主義 池田 あつ子 愛知

置物の小さなツリーとトナカイが張り子の午に替る玄関  
三が日一人で過ごすことになる令和八年からの正月  
妣植糸し梔子の実で色付けしつくるきんとん食べきれぬ量  
輝ける初日浴びればあたたかく楽観主義が蠢きはじむ  
なにか良いこともある筈 根拠などないのだけれど思ふ新年  
電話あり「あっちゃんですか」その声は道草好きの幼ともだち



街の書店 井上啓子 愛知

家計簿と日記を求めそのあとに書籍を選るは至福の時間  
わが街の書店に岩波新書なく中公新書をしげしげ眺む

これまでは俊輔を読み来たれども今は書店に太郎が並ぶ  
幌馬車にそぼ降る雨を忘れない十八で觀し「アメリカ・アメリカ」

白粉はクレンジングで落とすこと母に教はる十九の春に  
飲み会の後の転た寢覚めてよりクレンジングで化粧を落とす

狩野 一男選

生きる意義 三木裕子 愛知

君に瘡みつきりてより生きる意義考へはじめた 珍しく雪  
暖かき縁側近くに來るすずめ生きるつらさを見せず集ふ  
素盞鳴神社の破魔矢飾りて生きる事見つめなほせり君病みてより  
健康に生くるは奇跡朝日浴びあかく輝く富士を眺める  
病なき時間はいかほどやれる事やりたき事を思ふ大寒  
シクラメン紅のはなびらひるがへし咲きをり生きる証しのやうに

京は冬こそ 奥山 祈梨子 京都

黒豆の艶よし味よしかたち良し丹波の逸品ちちはは想ふ  
数の子と海鮮サラダに赤ワイン、コーラ割りにしほろ酔ひ気分  
炊きたてのご飯に千枚漬をのせひと口 京は冬こそ良けれ  
はんなり漬けうすべに色の大根のハーフサイズはひとりに充分  
しば漬のきょうりの歯ごたへキウキウと紫蘇のかをりに包まれる卓  
西京漬さはらの切り身の大きくて明日の朝にと少し取り置く

遺品のラジオ 津玲 海智子 大阪

降り積もる落ち葉かさこそ鳴らしつつ餌をあさりゐる公園の鳩  
冷えしるき団地の部屋に膝かかへ独りテレビを見てゐる夕べ  
背まるめ石油ストーブ点けてゐし妣の頭ちくる冷えしるき朝  
スカーフをかけてベッドの枕辺に置きあり母の遺品のラジオ  
父母と水炊きの鍋囲みたる遠き日憶ふ寒き夜更けは  
たまらなく亡き父母の恋しき夜あたたかき湯に首まで浸かる

足 長 中村 京 兵庫

朝日差しわが影長く地にのびる冬至のけふはほんに足長  
年の瀬に漏水調査たのみたり外の面、床下いづこで漏れる  
半時も経たぬに漏水箇所見つけ軒端掘りゆく老作業員  
色の良き橙選びて注連飾を今年もかざるしあはせ思ふ  
大吉を引きし息子を連れ出してジャンボ宝くじ二十枚買ふ  
白馬の大絵馬くぐり孫たちの合格ねがふ天満宮に

二〇二六年 中西克至 奈良

チエルノブイリ事故より四十年フクシマ事故より十五年 二〇二六年  
チエルノブイリ事故後の九月に生まれしわが長男は今年四十  
二〇二六年明けてわたくしは父が生きたる歳を越えたり  
外干しの洗濯物が凍るほどの寒波到来粕汁作る

大阪の生野界隈ぶらつきけり気になる看板「宅老所あおぞら」

「木曜日日本酒ワイン10パー引き」京都伏見の「英勲」を買ふ

鈴木 千登世選

湯気の立つ鍋 米沢和子 広島

身の廻り店消え人消え空き家増ゆ 冬霧に沈む三次盆地は  
「ま、いいか」まじなひのごと繰り返す溜りしあれこれ今年も持ち越し  
生きるよりうまく死ぬこと難からむ雪降る空に妣のおもかけ  
湯気の立つ鍋の向かうに夫が居て会話は必要なきこの時間  
「私には国際法は必要ない」言ひ放ちたり米大統領  
円空の仏像並ぶ美術館掌合はす人も居て静かなり

妻ぬぬ昼餉 村上篤 山口

一面を緑が被ふこの庭に今が定番と黄を添ふイチョウ  
川底の小石にくつきり影落とし寒泳ぎする鯉の風格  
「今」といふ時の重ねの中に生きその大切な「今」を掴めず  
セルフレジまごつくわれを想像し残りものにす妻ぬぬ昼餉

肉声の漸減しゆく今の世か電子音声ニュースを報ず  
情報の海なるスマホの扱ひを浅き知識で操作せる老い

半纏の夫 東谷テル子 香川

今宵また眠れぬ夜が降りてくる ひつじの千匹とうに超えるも  
オカアサン呼ばれた気がして縁側の夫を見やればいつもの居眠り  
ちんすこう・雷おこし・阿闍梨餅 年始の仏壇うまいもん市  
十九人履き物散らばる端つこに小さくきつちり姉さまの靴  
孫ふたり「またくるけんな」の帰りに際に半纏の夫びしびしと泣く  
年始客退く玄関にこぼれるる琉球・みちのく・浪花の土掃く

托鉢僧 黒岩やよえ 高知

美しき映像と観るにあたたかく誘ひくるなりふるさとの雪  
ひつそりと舞ひ戻り来し絵葉書は長病む友の何を告げるや  
ゆく河の流れは絶えずけふわれを八十三年十日目がゆく  
ふがひなき人生なるよ秘密めくが一枚もなき写真整理す  
近づけば通路着なりぬ小暗くて長きトンネルに仄めきぬしは  
住む人が絶えし軒端にけふもをり托鉢僧のやうに青鷲

天狗の飛翔 江崎玲子 福岡

冬枯れの街路樹に赤きしるしあり伐採つげる墓標列なす  
成人式外国人も一割に多言語とび交う福岡となる  
「いつもの」と言えはすうつと蕎麦が出た亡父の昼はあへのみすず庵  
清正と細川一族治めたる肥後も今ではくまモン統治下

絵巻物ドローンの視点で描かれおり絵師にはできたか天狗の飛翔地層区分見わけることくマンションの外壁材見て時代読みとく

津金 規雄選

無のそら 野見山 弘子 福岡

気のむくまま時に立ち寄るふるさとは心の根っこ空気がやさしふるさとの寺のいちやうは真つ黄色ゆつくり生きよと大樹のこゑす父母も亡く家ももう無きふるさとの毀れ地蔵のほほゑみに会ふ(缶蹴り)であそんだ友の声せぬかふるさと暮れてゆふやけチャイムつかのまに起承転結終へしごと虹あはあはと消えて無のそら焼きたての秋刀魚を真白き皿にのせいただきますを語尾下げて言ふ

ぼつねんと待つ 石本 洋子 佐賀

西向きの書齋に置かれし椅子ひとつ夫の退院ぼつねんと待つ百均の今風のレジに躊躇して時代遅れのわれと悟れりモチノキに赤き実一つだにあらずされど木の葉で遊ぶよ小鳥はカラス一羽ゆつくり低空飛行せり何を採してゐるのか君は「湯たんぽ」とふ言葉聞きたび思ひ出す冷たき布団と妣の優しさ何となく心の渇く土曜日碧色の海の波を見に行く

鴨のあたま 中川 玉代 長崎

葉の落ちて南京黄櫨の白き実が青空に映ゆ霰のごとし  
ブラシにてこすり上げたる玄関のタイルひかるも夫は気付かず

仏壇に庭の寒菊活けたれば黄にはなやげり冬至の朝を  
地元産南瓜はすつと刃の入るやはらかさなり冬至の夕べ  
冬至の湯に柚子を二個のみ浮かべたり値上げの波は柚子にも及び  
ピロートの光沢をもつ緑いろ街川に浮く鴨のあたまは

パン屋のパンセ 持木 美智子 長崎

本棚に背の色褪せて眠りぬし『パン屋のパンセ』の扉をひらく  
「健康に良い料理」とふを学びをりシニア世代の町民講座  
過ぎし日の捕鯨の鳥の名残なり歳末抽籤会くぢらを当てる  
欄干に夏よりかけらるるちささ帽あるじを待ちて歳晩となる  
三箇日に食べ過ぎた所為体重がああ体重が元に戻らぬ  
芋粥にすずしろの葉を刻み混ぜ碗華やげりけふは七草

悪友の蜘蛛 岡田 万樹 熊本

トルストイの生まれ国なりロシア軍ウクライナへと侵略をする  
亡き友がいつも言つてた朝咲きて昼にはしほむあさがほが好き  
一日をひとと話さぬ夜のふけにおやすみなさい悪友の蜘蛛よ  
あの雲にのりてかの世にゆきたしと夕焼けの空仰ぐ老いびと  
髪の毛と爪を残して出征し南方の島に父はねむれり  
雑炊を老人食のごと詠みし斎藤史も逝きて何年

☆

☆